東京都北区立袋小学校

令和5年度　北区立小学校学力向上を図るための全体計画

令和5年度「北区基礎・基本の定着度調査」を受けての各教科の分析	
国語	学校全体（2～6年）の国語の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。しかしながら、「書くこと」に関する領域においては、学年が上がるにつれて区の平均正答率を下回る傾向が見られた。普段から書く習慣を身に付けられるよう、低学年のうちから書く力の育成を推進していきたい。
社会	学校全体（5，6年）の社会の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等である。やや知識の定着に課題が見られる様子があることから、単元学習後に復習の機会をもつなどの工夫をしていきたい。また、内容別では「都道府県の様子」「工業生産」で課題が見られているため、知識・技能面の定着を図っていく必要がある。
算数	学校全体（2～6年）の算数の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。しかしながら、学年が上がるにつれて区の平均正答率と同等となる傾向が見られた。特に、観点別では「主体的に学習に取り組む態度」の正答率が低くなっている。基礎・基本的な力の定着を図るとともに、問題解決型の授業を展開させていく必要がある。児童自身が自らの学習課題をもち、主体的に学習に取り組んでいけるようにしていきたい。
理科	学校全体（4～6年）の理科の正答率は、全ての学年が区の平均正答率と同等か、もしくはそれを上回っている。どの領域や観点別においても、区の平均正答率を上回っているものが少ない。このことからも、基礎・基本の定着を図りつつも、観察・実験などを通じて、科学的に探究する学習活動（主体的に学習に取り組む活動）における指導の充実を図っていきたい。

本校の教育目標

〇よく考える子

〇体をきたえる子

〇思いやりのある子

〇最後までやりぬく子

学力向上にかかわる経営方針

・「わかる」「できる」喜びを味わえる授業改善
・北区基礎・基本の定着度調査等の結果を基にした個に応じた指導の充実
・授業観察による指導・助言や校内研修等のOJTの推進（きたコンの扱い方を含む）
・GIGAスクール構想に基づく、ICT機器の活用

本校が児童に育成したい力

・生きて働く「知識及び技能」の習得
・未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力」の育成
・学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養

校内における学力向上推進体制

学力向上に関する特別委員会（研究推進委員会、学力向上・少人数推進委員会、通知表委員会、特別支援教育委員会）、分掌（授業改善推進プラン、学校図書館、放課後補充教室（学力フォローアップ教室）等を有機的に機能させ、児童の学力向上を図る。

本校の授業改善に向けた視点

指導内容・指導方法の工夫	教育課程編成上の工夫	校内における研究や研修の工夫	評価活動の工夫	家庭や地域社会との連携の工夫
・課題解決型・探究型授業の実践 ・児童に「わかる」「できる」喜びを味わわせる授業づくり ・学習活動「振り返り」の充実と継続 ・十分な教材研究によるねらいの明確化 ・児童が主体的に取り組む学習活動 ・授業のユニバーサルデザイン化 ・GIGAスクール構想に基づく、きたコンの積極的な活用 ・Q－U調査を活用した学級経営	・授業時間確保のための学校行事の継続的な見直し ・生活科・総合的な学習を中心としたカリキュラムマネジメントの計画 ・放課後補充教室（フォローアップ教室）の充実 ・きたコンを活用した学習タイムの推進（個別最適化した学習） ・日本語学級の充実と担任との連携	・運動の楽しさや喜びを味わい、三つの資質・能力を育む体育学習を目指した授業づくりについての校内研究 ・授業改善を図るための、教員同士の積極的な授業参観−ブロック会での事後検討を通して− ・組織的で授業に生かせるOJT（校内研究関係、情報モラル等）	・児童の実態に即した評価規準に基づいた観点別評価の実施 ・評価規準や評価方法の工夫・改善（きたコンを利用したデジタルポートフォリオの活用） ・きたコンを活用した教科横断的な学習計画の作成 ・PDCAサイクルを意識した指導と評価の一体化	・学校ファミリーにおける情報交換 ・地域の教育力の活用 ・保育園等との交流 ・ホームページの充実と更新 ・学校ボランティア、PTAとの連携 ・学校便りの発行（月１回） ・児童の変容を自身も保護者も感じる事ができるキャリアパスポートの活用

指導方法の課題分析と具体的な授業改善案 （4年）

	指導方法の課題分析	具体的な授業改善案	補充・発展指導計画
国語	全体の平均正答率は、区の平均正答率を下回る結果となっている。学年の内容別正答率を見ると、「漢字を書く」と、「言葉の学習」の2つの内容が顕著な課題となった。「漢字を読む」ことは区の平均を上回っているため、習った漢字を書くことを定着させる必要がある。	学習した漢字の定着を図るため、漢字の小テストを定期的に行う。問題は事前に配布し、実施日も事前に知らせる。また、漢字を書くことを習慣化させるため、日常生活の中で文章を書く際には、積極的に漢字を使うように指導する。自分が書いた文章を見直し、習得した漢字を使えているか確認する習慣を身につけさせるよう指導する。	国語の授業以外でも、意味の分からない言葉がある際は、意味を調べ、語彙力を増やしていくと共に、文章を書く活動を積極的に取り入れ、漢字を書く機会を増やしていく。また、漢字テスト後は必要に応じて反復練習を行い、漢字の定着を図っていく。
社会	コロナ渦の影響もあり、これまでにおいて体験的に学ぶ機会が失われており、児童も社会科の学習の面白さを体感できていない。動画教材やオンライン教材をうまく活用することで、興味関心を高めていく必要がある。また、これまで以上に自分なりの学習課題をもち、主体的に学習に取り組んでいけるようにしていく必要もある。	社会科見学等の実地での学習体験の確保をする。教室では、紙面上の学習だけではなく、動画教材等も効果的に活用していくようにする。また、単元導入時には、学級全体で学習課題を立てる活動を行い、それらを基に、児童自身が自分なりの問いをもち、その問いの解決が図れるような学習機会を設けていく。教師は、児童の探究心も同時に育む。それらを通じて、社会科の学習の楽しさを実感できるようにしていく。	実際に体験できないような学習については、教科書だけでなく、ICT機器、きたコン等を積極的に活用していく。調べる際には、「課題の設定」、「情報収集」、「整理・分析」、「表現・まとめ」の総合的な学習の時間で学んだ探究的なサイクルも活用できるようにしていく。
算数	結果から、簡単な計算問題を解く力は定着しているが、文章問題など場面を想像して立式することに苦手意識が見られる。また、昨年度学習した「かけ算」「わり算」の定着が課題となった。、また、「長さ・重さ」でも目盛りの読み取りや、単位を用いた計算などにおいて、課題が見られる。このことからも基礎的・基本的な学力の定着を図る必要性がある。	児童の基礎的・基本的な学力の定着を図るために、単元導入時には前学年の既習事項の復習から実施するようにする。「数と計算」領域の単元時にも、百マス計算プリント又はわり算の復習プリントなどを授業の導入で実施するようにする。また、反復練習だけで終わらず、定着した内容を活用する場面を設け、学習意欲の向上も図っていくようにする。	火曜、木曜にある学習タイムを活用し、授業内容の復習を行ったりする。また、授業内でも基礎・基本的な学習内容を振り返る、学び直しの機会を意図的に設けていくようにする。個別支援が必要な児童には、パワーアップ講師の力を借りるなどして課題を解決し学習に主体的に参加できるようにする。
理科	内容別・観点別ともに区の平均を下回る結果となった。具体的には「電気の通り道」「身近なしぜんのかんさつ」「植物の育ち方」「風やゴムのはたらき」「じしゃくのせいしつ」の5つが区の平均を下回った。実験を通して、実感しながら理解することで、学力の定着を図っていく。	日常の疑問から問題を見いだし、問題解決型の授業を行う。既習事項や経験から予想させる等生活と結びつけながら学習を進める。また、実験や観察にじっくり取り組ませ、そこから出た気付きや疑問を大切にしていく。	ICT機器を活用し、写真として記録を残すことで、いつでも振り返れるようにするなど、児童の学習を補助できるようにする。また、学習内容を実生活につなげられるように、身近な内容を取り上げていく。小テストを行い、学習内容の定着を図る。